

部局史（外国語学部）編集所感

宮原佳昭

このたび南山大学七十五周年記念誌の編纂に携わることができ、大変光栄に思っております。部局史の各学科の文章は、各学科の有識者の方々にご執筆いただきました。各学科の概要が端的にまとめられた素晴らしい内容とします。ご執筆いただいた皆様に改めて心より御礼申し上げます。

本文では、一教員として、また歴史研究者として、所感を述べたいと思います。

一教員として言えば、私は二〇一一年四月に外国語学部アジア学科へ着任し、十年目の区切りに今回のお仕事をいただきました。外国語学部に関する個人的な体験を振り返ってみると、第一に、外国語学部創設五十周年記念行事の一環として中国語劇に携わりました。周錦樟先生による学生指導に同席したり、中裕史先生と一緒に小道具を買いに行ったり、日本語字幕や効果音を一人で準備したりしたことが懐かしく思い出されます。

第二に、二〇一五年度から二〇一七年度まで、キャリアデザイン科目の運営に携わりました。当時は各企業への連絡や講師任用手続き、当日の授業運営など、一つの科目としての負担が大きいことに不満を感じる一方、私自身が学生のキャリアについて考えるよい機会となりました。このたび教授会資料、自己点検評価委員会報告書な

ど外国語学部に関する資料をめくるなかで、キャリアデザイン科目を作った方々の苦心に触れることができ、大変勉強になりました。今後は座学だけでなく、インターンシップを新設するなど、キャリアデザイン科目をより一層充実させたいという思いを新たにしています。

第三に、二〇一四年度より学部将来構想ワーキンググループの一員として、また二〇一六年度から二〇一七年度に学部教務委員として、学部改組に携わりました。当時は外国語学部が置かれている状況を完全には理解できないまま突き進んだものですが、このたび一連の資料をめくってみると、志願者数の減少や外国語学部共通科目の問題点など、長年の問題が山積していたことがよく分かりました。これらの問題は改組後も解消しきれていないわけではないと思われまます。

歴史研究者として言えば、私は中国近現代の教育史を専門とし、中国で編纂された各地の学校史を資料として分析しています。そのため、このたび大学史を編纂する立場になったことは、感慨深いものがあります。

資料として学校史を見た場合、できあがった学校史は紙幅の制限などもあって、起こった出来事の羅列になりがちです。また、学校史を編纂する目的に沿うよう、列挙される出来事はその学校を顕彰するためのものに偏りがちです。これはこれで事実確認作業のために極めて重要なのですが、歴史研究者として興味があるのは、画期となる学校行政政策の決定過程です。すなわち、政策決定にあたって、どのような人物が関わり、彼らはどのような立場から、どのような議論を展開したか、などです。

例として、私は外国語学部の部局史のなかで、二〇一七年度の改組において、二〇一三年度に学部将来構想ワーキンググループが設置されたことに言及し、「ワーキンググループでは、学科の新設・統廃合やデュアル・ディグリー導入などさまざまな案が検討されたが、結果として採用されたのは、二専攻制の導入、海外フィールドワーク

の準必修化、学部共通科目の見直しなどである」と記載しました。もし私が研究者としてこの部分を読んだ場合、興味が出てくるのは、ワーキンググループの構成員は誰か？ 構成員にはどのような派閥があったか？ 決定までにどのような議論があったか？ などで、ここまではたかとも他人事のように述べていますが、実のところ、私自身がこのワーキンググループの構成員の一人でした。ただ、当時の記憶があいまいで、どの問いに対してははっきりと答えることができません。七十五周年記念誌を作成することが当時から分かっていたら、メモを日々残したことでしょうが、当時は日々のことに精一杯で、それどころではありませんでした。

余談ですが、部局史を執筆後に読んだ石川禎浩『中国共産党、その百年』（筑摩選書、二〇二二年六月）によると、一九二一年七月に開催された中国共産党第一回大会の参加者の顔ぶれと会期については、当時の資料は非常に少なく、参加者した代表の名簿も残っておらず、回想録の内容も曖昧模糊としているとのこと。その大会に参加した毛沢東も、開幕が何日であったかハッキリとは思えないとして、月初めの日を中国共産党の創立「記念」日としたそうです。「当時上海に集まった代表たちは、北京しかり広東しかり、誰もが遠路はるばる上海の大会にやってきましたが、どうやらその会合の期間中、会議の日にちが歴史上非常に重要な日となるという自覚を欠いたまままで終了したらしい。これはこれで、当時の共産党員の意識をリアルにうかがわせる話ではある。」（四十六頁）という記述に、そうだそうだと納得したものです。

もし私が学部将来構想ワーキンググループに関する部分をもっと詳しく研究したい場合には、別の資料にあたる必要が出てきます。まず重要なのは同時期に作成された一次資料、すなわち外国語学部教授会記録です。これは外国語学部事務室に保管されているので、これにあてればワーキンググループの構成員はすぐに判明します。また、同じく教授会記録には、ワーキンググループからの中間報告や最終報告が残されているので、これを追うことで、

ワーキンググループにおける主要な議論の経過が分かります。それではここから先、毎回の会議でどのような議論がなされたかについて、毎回の議事録があればよいのですが、まず外国語学部事務室にはそれが保管されていません。そもそも、毎回の会議で記録係がいたかどうかも定かではないため、議事録が存在しているとしたら、議長や参加者が私的に作成していたものでしょう。当時のワーキンググループの構成員にお声がけすれば、見つかるかも知れません。

このほか、当時のワーキンググループの構成員はどのような派閥に分かれ、それぞれどのような意見を持っていたかについては、もっとも興味深い題材の一つでありながら、公的な記録には残りがたいものです。ここからは、回想録やインタビューの順番でしょう。もちろん、気をつけなければならぬのは、上記の私的な議事録にしてもそうですが、自身に都合のよい部分のみを強調したり、都合が悪いと思われる部分を削除したりする可能性があることです。例えば、もし私がワーキンググループに関する回想録を残したりインタビューを受けたりしたら、おそらくその内容の大半は、共に過ごした「戦友」たち（彼らのうち数名は他大学または他学部へ移籍しましたが、ありがたいことに今も交流は続いています）との思い出話や愚痴になると思いますが、私が語る内容は、あくまでも私から見たワーキンググループであり、それが果たして事実をどれだけ反映しているかは怪しいものです。

回想録やインタビューは、他の資料でクロスチェックするなどの資料批判を経ることによって、一次資料などでは分からないことを解明するための重要な資料となり得ます。そこで、私としては、完成した七十五周年記念誌を外国語学部の教員一同にご覧いただいた上で、その内容に関する所感や回想録をぜひご執筆いただき、それらを取り上げて南山アーカイブに保管するのがよいと考えています。きつと、百周年記念誌を執筆する上で、また南山大学外国語学部史を研究する上で、重要な資料になることと思います。